
随 想

「鉄と鋼」の読者と投稿者の立場

荒 木 透*



目下本会会誌「鉄と鋼」は第 53 年号を発行しつつあり、毎月一万の会員の手許にとどけられている。月例の会誌は本月号のように実験研究を主とした「論文」や鉄鋼に関連した科学技術面の review ともいべき「技術資料」その他展望、講義、解説のような記事をメインとし、協会としての行事や公示事項を併せて編集されている。現在はそれ以外にも論文特集号が適時発行されるが、さらに春秋の講演大会の前には特別付録号として予講集が追加されている。

一万名にも達した本会の会員は広い範囲の鉄鋼技術関係者よりなっているが、それぞれ事情に応じて異なつた読書態度をもつておられ、毎月受取る会誌の利用度や期待されるところも千差万別であろう。

さて、学協会の会員への最も普遍的な窓口である学会誌なるもののあるべき存在形態についてはいろいろと議論の多いところである。たとえば多数層へのサービスのみを狙つてあまり通俗的でわかりやすい内容に偏すると国家的レベルの向上啓発に役立たないという考えもあり、学会としての風格からいつでも好まれない面がでる。また一方、真に学術的に価値ある論文のみを厳選し最高度の技術理論に徹底した内容を載せる方向、いわゆるアカデミックに徹することになると、現在の鉄鋼協会会員の多数の人から「鉄と鋼」を敬して遠ざけ、読みこなし利用しないまま棚につんでおく飾り物にされてしまうおそれがある。結論としてこれらの間のよき調和が必要であろう。

また別の面でいえば、鉄鋼技術の主流を鉱石から製鉄、製鋼、加工、処理、材質にいたる製造プロセスに置き、いわゆる冶金学的な技術およびその基礎をなしている物理化学や物性理論の関連分野のみに重点がおかれると、現に鉄鋼協会会員もしくは潜在的会員とみなされる鉄鋼会社の関連技術部門（たとえば I. E., 設備工学, 制御工学）方面のエンジニアに対して学会誌としての魅力の少ないものになってしまう。過去の「鉄と鋼」は“Stahl und Eisen”などに比して、この点の弱いことは事実として指摘せられるが、先項よりこの面の改善については編集委員会の強化と、共同研究組織との連けいの形で進められつつある。

以上のように考えると、単一の「鉄と鋼」一誌では、世界第 3 位への高度成長をとげたわが国鉄鋼業を背景とする本協会拡大の新時代に即応して行けないのではないか？ という一つの疑問も起こってくる。一方、欧文誌 Tetsu to Hagané Overseas は昨年より Transactions of the Iron and Steel Institute of Japan と改名して隔月発行にふみ切り、質、量ともに日本の鉄鋼技術の真価を世界に問う国際専門誌としての使命を果たすことになつた。この内容については高度の selection が至当であることは論をまたないが、掲載内容の専門分野についてはやはり化学冶金、物理冶金、物性論を基礎とするものばかりに割り切ることはできない。したがつて「鉄と鋼」誌と同様に engineering side をも含めることにしている。もし英文を日本人会員の多くの人々に不便なく読んでもらえるようになれば、将来 Transactions が本会の academic な発表活動の場として国内会員に対する分も分担できるようになると考えられるが目下のところ現実的とはいえない。

* 編集委員長 東京大学教授 工博

学会誌のまた一つの使命は、学術、技術の進歩発展に研鑽している人達に、できるだけ多くの成果を発表する場をつくり、発表意欲に満足感を与え向上心を刺激することにある。これらはまた、それぞれの関心を有する読者によつて読みかつ検討されることによつて相互研鑽し、進歩に役立つことにもなるはずである。この目的のためには、学会発表論文の集録なるものが専門内容別に整理編集されて掲載されることが望ましい。問題は、その発表内容や専門分野と利用者層の分布との関係などが、必ずしも前述の全会員に「読んでもらう」ことを主に編集される毎月の「会誌」の目的とうまくマッチしがたいことにある。また数的に割愛総ページ数は投稿者の人権尊重や奨学的意味からいつて、なるべく公平、総花式に多くならざるをえず予算上の限度につきあたる。そこで好ましい形として「論文集」という投稿者のためと特定利用読者の便を考えた編集形態が検討されることになる。他の学協会では、この種「論文集」の扱いについてほとんどが学会の本誌とは別個に切りはなし、有料の講読制とし、全会員には配布していない。しかし鉄鋼協会では当面論文特集号はできるかぎり「鉄と鋼」の予算枠内で集録收拾してゆく方針となつており、他学会とは異なり全会員に circulate されることは恵まれた事情である。

編集委員会では去る10月から「論文」「技術報告」の自主投稿についてかなり自由度の高い制度とし会員の旺盛な投稿発表意欲に応えることとなつた。改訂寄稿規定は既載のとおりであるが、これは以上述べたような主旨に則つたものであり、委員会の責任編集による毎月号と、自主投稿を扱つた「論文特集号」とは全会員からみてその利用され方の異なつた2種類の技術雑誌と考えていただいてもよいものである。もちろんそれぞれに掲載された論文研究発表などは何れからも同等に「依論文賞」候補が選ばれるべき性格のものである。会員諸賢の一層のご研鑽によるご投稿とご愛読を乞うと同時に、私どもの指針にいろいろとご意見をお寄せいただきたくお願いする次第である。